

かな式まちかど

ひらがなはどこから来たのか ひらがなはなにものなのか ひらがなはどこへ行くのか

大村 伸一（おおむら しんいち）

そもそものはじめから「て」には字分は何であるのかの確信がなかった。ずっと「く」と似ているとか「へ」と読み間違えてしまうとか、中には本当は「と」なのではないのかと言う文字もいたが「て」にはそのどれもが正しいとは思えない。この左右非対称で今にも倒れてしまいそうな形が文字であるということ自体、何か間違いがあったのではないかと思わずにはいられない。確かに「と」と似ていることは確かで「てき」が「とき」と読まれたときなどは字分でもその間違いに気がつかなかったし「てっていてき」を「とっといとき」と読まれたときには、それでも嫌な気分にはならなかった。「と」のことを考えると、なんだか楽しい気分になったし、いつか「と」に直接会うことがでたらと思うと、知らず知らずのうちに「て」の形が「と」にかわっていきたりするのだった。

「て」は「い」や「た」や「か」や「む」やその他無数に存在する線と線が離れている文字が怖くてたまらない。「ふ」にいたっては想像するだけで恐ろしく冷や汗がでてきて止まらなくなり字分の形が「で」に変わってしまうので、あわてて汗を拭わなくてはならない。

あんなふうに線と線が離れているのにひとつの文字だというのはいったいどんな気分だろうか。彼らには字我とか字己の同一性などというものがあるのだろうか。彼らは本当に一文字なのだろうか。

「て」は思わず知らず彼らの気持ちを考えようとして、その想像が恐ろしくて呼吸ができなくなり、息ができないのにもかかわらず叫び出したくなる。そして震えながら暗闇の中でそれら線と線が離れている文字のことを忘れるまでじっとしている。

だから「て」はいつも字分の部屋から外に出ず、一日中一筆書きのパズルを解いて過ごす。たまには連続体のイメージビデオを見ることもあるが、そのたびに連続であるということがどれほど安心でき幸福なことなのだろうかと思わずにはいられない。「て」もいつか連続体になることができるだろうか。もしそうなれたらと思うと嬉しくてたまらなくなる。

いつからか「の」は字分には何か大切なものが欠けているのではないかという思いが強くなり、なくしたものをを見つけだすために一日中町の中を歩き回っている。

「め」をみつけたときは、これが字分のなくした部分かと「め」の右上から左下につながっている線に手をかけ奪い取ろうとしたが、抵抗する「め」と周りにいたほかの文字たちに取り押さえられ、そのなくしたはずの部分を手に入れることはできなかった。「め」は見ためどおりのやさしい性格だったので「の」の気持ちを深く理解して、その線は字分が初めから持っていたものであり「の」がなくなったり奪われたりしたものではないと説得したのだが「の」はその説明をまったく理解していないかのように、隙があれば「め」の線に手をかけようとするのだった。

また別のときには「の」は「あ」を発見し、その十字架の重みで倒れそうになっている字分自身を救うために、からみついている十字架を「あ」からひきはがそうとした。勿論「あ」から十字

架の部分をはがすことはできず「の」は涙をながすことができないくせに泣きながら「あ」の体を殴り続けたのだった。見た目のとおりに救世主でもある「あ」は、そんな暴力をふるった「の」を許し「の」の苦しみを救おうとしたのだが、救世主の起こした奇跡は「の」を一瞬「○」に変えただけで、それ以上の救いは与えられなかった。

確かに「○」である間「の」は何か欠けているという飢餓感を感じはしなかったが「○」は記号であり文字ではない。「の」にはまだただの記号として生きるつもりもなかったし、そんな屈辱には絶えられそうもなかった。

「あ」は字分の奇跡が拒絶されると、唇をとがらせながら足早に「の」の前から姿を消した。

「の」の目の前に残された「あ」の足跡は、まぎれもなく「の」という形をしていたが、十字架ばかりみつめていた「の」はそのことにはまったく気づかなかった。

また別のときに出会った「よ」には「の」は何かとても不愉快な思いを感じた。どことなく「あ」に似ていなくもない「よ」を直視することができず、目をそらしながら「の」は、あなたはどこから来たのか、字分を証明するものはあるのか、またこれからどこへ行くのかと尋問した。そのときの「の」はおそらく何か警察官のようなものだったのだろう。そう確信したのは、その質問が生まれながら知っている台詞でもあるかのように自然と出てきたからだ。

「よ」は字分は生まれも育ちもこの町であり、身分を証明するものといったら小学校での国語の授業くらいしかない。そして、これからもずっとこの町に住み続けるだろうと答えた。その「よ」の視線が「の」の体のいろいろな部分をみつめるたびに「の」はその部分が痒くなったり血が滲んだりしたので「よ」は何か疫病の擬字化されたものではないのかと疑いはじめる。勿論「の」は疫病を擬字化したような文字が存在したという話は聞いたことも読んだこともない。ただ

「の」は字分の記憶にないことを知っていることがよくあるので、そういった疑いには根拠はないが、真実なのだろうと薄々感じてはいた。

趣味で書いているのだという「ふ」の小説「一筆書きの幸福」を読んで以来「と」は一筆書きができない字分の体形が歯がゆくてしかたがない。もうすこし右上の斜めの線が上にずれていれば、いともたやすく一筆で書けるだろうにと思うと、字分の運命を恨むこともある。とはいえ、勿論「と」はまだ字分を一筆で書くことを完全にあきらめたわけではない。なんとか書くことができるのではないかという希望は捨てられず、一日に何時間かは、字分を一筆で書く方法をあれこれと工夫するのだった。今まで何度か成功したこともあるのだが、もう一度書いてみると必ずといっていいほど失敗する。何故失敗するのかはわからない。

「と」は字分の右上の斜めの線が少しだけ上に移動した姿を毎日想像してみる。いかにも子供っぽい空想なので、他の誰にもその空想のことを話したことはない。それに、ときどきそんな文字が世界に既に存在するのではないかと思うこともあり、そんなときには「と」は失望のためすこしだけ「し」のような形になってしまう。

その形になったとたん「と」は字分を一筆書きできることに気づき、この文字になればいいのだという期待にわくわくするのだが、すぐにそれがすでに存在する「し」という文字であることを思いだし「と」は落胆のあまり泣く気力も失いそのまま眠ってしまうのだった。

「と」は右上の斜めの線がもうすこし上に移動したそんな文字がもしも存在し字分の目の前に出現したら、もうその文字にはなれないという事実やその文字が存在するという現実を嬉しいと思うのか、あるいはねたましいと思うのか、それとも怒りを感じるのか、字分がどういう反応をするのかまったく想像できなかった。

そんなときが来なければいいという思いとそんな文字と出会いたいという思いが字分の中で渦巻き「と」は「ぬ」のような形になりかけながらそれ以上何も考えられなくなる。

思い出すこともできない程昔から「よ」は他のひらがなに嫌われていた。道を歩いているだけで右下のループの部分に棒を突っ込まれてそのまま道に倒れたこともある。誰も起きあがるのに手を貸してはくれず「[°]」や「^ゝ」を投げつけられ、もはや文字ではない形にされたりもした。文字でないものになった気持ちは、なったものにしか分らない。不安と焦燥に体中の線が歪み、ますますひらがなの形から遠ざかってゆく。その恐怖に負けてパニックにならない文字はなく、そうになってしまうとひらがなが一つ世界から消滅してしまうこともある。すでに多くのひらがながそのようにして消えてしまった。だが「よ」はそんな場合でも、必ずもとの「よ」に戻ることができた。それを見て他の文字は残念がるのだが、元に戻れるということがどれほど大変なことなのか理解できる文字はいない。

「よ」は幾度もいじめられるうちに、ひどい怪我を負い記憶のいくらかを失っている。おそらく「よ」の上の横線が左半分しかないのは、誰かに乱暴されて折れてしまったからなのではない。

趣味で書いているのだという「ふ」の小説「折れた右腕」を読んだとき「よ」は字分の横線の右半分が誰かに奪われてしまったのだと確信した。その証拠に、失われた右半分の付け根にあたる部分は、今でも文章を斜め読みされるとき、ひどく痛む。ときには、その右半分の線がまだそこにあるかのように感じ、その先端のひどい痒みに絶えられなくなることもある。

ただ、もしその失われた横線がかつて字分にあったとすると、そのときの字分がなんという文字だったのだろうとも思う。「よ」はこれまでそんな文字は見たことがなかったが、それこそがかつて字分がその文字であったことの証拠ではないだろうか。字分が「よ」になったために、その文字が失われたのだ。「よ」はその失われた横線を求めて一日に三度、町の中を放浪する。

その「よ」の前世とでもいうべき文字によく似た文字のことを「よ」は知っている。「お」と「は」だ。

「お」は「よ」にその話を打ち明けられたとたん怒りだし「よ」を殴ったり蹴ったりして、二度とそんなことを考えるんじゃない。もう一度その話をしたらお前がどこにいても飛んでゆき文字でなくしてやるからな、と脅した。文字でなくすということは文法的に不可能であり、普通の文字にそうやすやすとできることではない。だから「よ」はいつもいじめられたときにやりすごすのと同じように「お」の怒りをやり過ごそうとした。だが「お」の怒りは激しくそれから長い間「よ」のまわりから離れず「よ」が同じ話を蒸し返えさないように監視していた。どうして「お」がそんなに怒るのか「よ」にはさっぱり分からなかったが「お」の左肩にある点を見るたびに妙に不安を感じるので「お」に逆らう気持ちにはなれなかった。

「お」が「よ」の監視をあきらめてからしばらくして「よ」は「は」に字分の前世の話をした。「は」は「お」よりも「よ」に似ていると「よ」は思っていたので少しは好意的な反応を期待していたのだ。「は」はその話を聞くと何も言わず長い間「よ」のことをみつめ続けた。一週間「よ」をみつめた後「は」はまるで「よ」などそこにはいないかのようにぶいと席を立ち、どこかに行ってしまった。一週間の間、なにか温かい言葉がもらえるものと思って待っていた「よ」は驚きまた失望し、なにか文字ではない形になりかけてからやはり「よ」に戻った。

「よ」はその二つの出来事の後、町の中を探したり図書館で古い資料を調べたりして字分の前世について研究を続けている。

幸せに育った「ま」には何も不安がなかった。上にある二本の横線はいつもバランスよく安定していたし、左右非対称の下半身も、右下のループがしっかりと体を支えてくれたので、何も不安はなかった。「ゝ」も「゜」もつくことはないし、なにしろ母音は「あ」だ。何もかもにめぐまれた「ま」はいつも楽しげに遊びまわっていた。

そんな「ま」が初めて不安を感じたのはかな式市の駅前で「ほ」を見つけたときだった。字分にとてもよく似た「ほ」に思わず声をかけようとして近づいた「ま」は、近づくにつれて「ほ」が「ま」とは全然違う、何か恐ろしい部分を持った文字だということに気づいた。「ま」そっくりだが「ま」に比べてすこしスリムな「ほ」の左側は、何か野生の獣のように思えたし、右側の縦線によってかもしだれる非対称の影は「ほ」が表には出さず隠している何か危険なものを意味しているように思えた。あまりにも恐ろしくて「ま」は「ほ」にあと五文字の距離でそれ以上進むことができなくなった。萎えた心は「ま」の上の横線を萎縮させ、なにか文字に似てはいるが見たことのない形に「ま」を変えてしまう。しゃがみこんで震えながら「ま」は「ほ」から目が離せないでいた。もしも目をそらしたらその瞬間「ほ」に襲われ存在を抹消されてしまうのではないかという恐怖が、恐ろしいものから目をそらしたいという衝動より強かったからだ。

「ほ」は、しゃがんでいる、文字ですらない形には気もつかずに通り過ぎて行った。だがその後もしばらく「ま」は動けなかった。

ひらがなではなくなっていた「ま」が「ま」に戻るまでのしばらくの間、物陰からその姿を見ていた「よ」はあまりの驚きに「よゝ」のような文字でも単語でもない形になってしまっていた。そこにいるのは字分の前世ではないか。前世と今世が同時に存在することはあり得ないことではない。だからこれまでずっとその文字を探し続けていたのだ。「よ」は気がつくと「ゝ」をちぎって道ばたに捨て、もとの姿に戻った「ま」を尾行しはじめる。なんとしても「ま」のことを知らなくてはならない。

「そ」はかな式市で最も有名な踊り手であり、公演になると毎回市民のほとんどのひらがなが集まる。楽しみが少ないのだ。先月は「を」の作りあげた「かな式白鳥」が「む」の振り付けで演じられた。「そ」のパートナーは若手の「や」だった。意外な抜擢に市民は驚いたが、そう言われれば「や」の重心の高さは天性のものであり、二文字の踊りがすばらしいものにならないわけがなかった。

その公演を見た文字の話では二文字の踊りはこれまで見たことがないほど高度な芸術になっていて、芸術というものは言葉によって表現することは不可能なのであり実際にその目で見るとしかないのだ。と断言する。翌朝の新聞では、その意見が引用された後に「そもそも「そ」も「や」は文字なのであり、文字によって表現されたものが言葉によって表現されたものであるなら、上記の賞賛は字己矛盾の好例であるとしかしいようがない」と厳しい批評をしていた。それは二文字の踊り自体への批判でなく、その踊りの感想への批判でしかなかったわけだが、その日の午後、記事を載せた新聞社が暴徒によって襲撃された。

趣味で書いているのだという「ふ」の小説「完全な舞踊は書き順も美しい」を読んで以来「て」は「そ」の踊りに憧れ公演には必ず出向くようになっていた。最初は怖くて行くつもりになれな

かったが、その恐怖よりも「そ」の踊りの美しさに惹かれたのだ。「て」はそれだけでなく「そ」のキャラクターグッズや伝記さらには身につけたものなどを収集し、いずれは字分も「そ」になるのだと堅く心に誓うまでになった。

初めての相手は「う」だった。「う」の上の点やその下にある魅力的な曲線は「ん」とつながることであまく「そ」になるはずだと思われたからだ。ぬぐい去ることのできない「う」への恐怖心を抑え、実際にベッドの上で試してみると「う」の下曲線は「て」の上の直線とあまりにもだらしなくつながり「そ」というより「うそ」に似ていなくもないが、もはや文字というのははばかれるような形にしかならなかった。

次に試したのは「い」だった。「い」が「そ」の上の部分とそっくりなような気がしたからだ。

「て」は「そ」になるために字分の恐怖心と戦い、脂汗を流しながら「い」と試してみたのだが「い」は「て」とは全くつながることができなかった。

最後に試したのは「り」だ。「り」も「い」に似ていたのであるいはだめかもしれないと思わなくもなかった。もしもこれでだめならもうひらがなは諦めて、カタカナか漢字の中で相手を探そうかと、そんな倒錯的な方法すら覚悟していた「て」だったが「り」はみごとに「て」とうまくつながり「そ」にそっくりな文字になった。幾分、縦長になって見えるので、そこは二文字ともに体をできるだけ縮め「そ」になりきってみせた。

て ああ、君の中にはこんなに強い「そ」への憧憬があったんだね。

り そうよ。あなたと同じ。あなたの中にも同じ強い感情があるわ。

て ずっと「そ」になりたかった。

り わたしも「そ」になりたかった。

て 幸せだね

り 幸せ

り あら、あなたは私が怖いの

て 今は怖くはないよ

り そうなのね。いくつかの部分から組み合わされたなひらがなが怖かったのね

て そうだ。君以外のそんなひらがなには近づくだけで冷や汗がでて体がふるえる

そう答えたとき、二つの別々の文字だったものは、一つの文字に融合してしまった。

そ 私だけじゃなく「そ」も平気なのよね。あ。そうだと。もう別々の文字ではなくなってしまったみたい。わたしはわたし字身が複数の部分からなる文字になってしまったな。ああ「り」も「て」ももういなくなってしまったんだな。わたしは「そ」だ。「そ」の上の点は誰も字分字身を嫌ったりしないと考え「そ」の下部分はその通りだと同意し「そ」として、わたしは「そ」だ、と心の中で断言した。

これからは「そ」の上の点を「そ上」とよび「そ」の下部分は「そ下」と呼ぶことにしよう。

「そ」以外の文字についても同様に。

「こ」はもはや一文無しだった。

ずっと以前、誰かに告訴された「こ」は不定期に開かれる法廷に出頭しては様々な審理を受けてきた。法廷では弁護士をやとわなくてはならず、その費用を払ったら字分が生活してゆくのに必要なものはほとんど何も残らない。そんな生活を続けていた。

趣味で書いているのだという「ふ」の小説「読み方も忘れられた告発」を読んでからは法廷における告発の理由の重要さが「こ」は気になって仕方がない。告発された理由を知らずに審理を続けることは法廷を侮辱する行為だとその小説には書かれていた。

だが、どういう理由で告発されたのかを誰も「こ」に教えてくれない。審理中の事件については何ひとつお話しすることができないのです、と判事「れ」は会うたびに言う。

「法廷とはこういうものなのです。法を遵守するとはこういうことなのです。正義とはこういうことを言うのです」と「れ」は真剣な顔を崩さずに「こ」にそう告げる。

それを聞いて「こ上」は法廷の厳かな天井に感激し「こ下」は磨きあげられた床を賞賛する。

「こ」は何故か理由も分からないままに「法廷」に呼ばれたことを誇らしく思い、すこし涙をながして「ご」になったりする。

「ご」になったとたん「ご上」は「れ」の左端の最後がちょっとはねているところが気障だと思う。なんて俗物なんだろう。右端の尖った部分も下品で鼻持ちならない。こんな文字の言うことを聞く必要なんかないぞ。そう「ご上」は考えるのだが「こ下」と少しも変わっていない「ご下」は、そんなことは考えるものではない。正義にはなにかしら真実があるものだ。もし「れ」が俗物だとしても「れ」が代表している法組織には敬意を表しなくてはならない。と説得を始める。

「ご上」と「ご下」が言い争いを始め次第に興奮してつかみ合いになる頃には「」がとれてしまつて「こ」に戻っている。そして「こ」はそんな諍いがあったことなど忘れ、笑顔で「れ」の言い分に耳を傾けている。

「勿論、あなたは告発された理由をご存知なのだから、わざわざ私に聞くまでもありませんよね」

「れ」が何か意味ありげな表情でそう締めくくったとき「こ」はぎこちなく、勿論知っています、と答えた。

「ふ」の「書き順も忘れられた告発」には、偽証は法廷を侮辱する最大の行為であり、そんなことをすれば死刑になっても許されるものではないという一節があった。それを思い出し「こ」は眠れない夜をすごしている。

ときどき「わ」は字分が「れ」なのか「わ」なのか分からなくなる。違いといえば左の線端が右にねじれているか左にねじれているかだけであり、それくらいなら普段道を歩くだけで右左右左といれかわるのであり、そのとき「わ」は「れ」になったり「わ」に戻ったりしているはずで、だから「れ」も「わ」も本当は同じ一つの文字なのではないだろうか。「わ」はそのように考え、その考えに熱中するあまり無意識に左の線端をひねって「れ」になる。

「れ」は突然字分が道を歩いていることに驚く。そして一步進むと字分が「わ」に変わり、そして「わ」が一步進むとまた「れ」に戻り、このようにして「れ」と「わ」を繰り返していることに気づいて唖然とする。字分は気が狂ってしまったのだろうか。これはすべて幻覚なのだろうか。「れ」はそんなことを考えている間に「わ」が「れ」と「わ」の違いについて考えていたことを思い出す。なるほど字分と「わ」とは同じ文字だったのだな。確かによく見ればまったく同じとしか思えない。それに気づくとは「わ」はたいしたひらがなだ、字分はたいしたひらがなだ。

それでも「れ」には少しだけ疑問があった。たとえほんのすこしの違いであっても、その違い故に「わ」と「れ」は別の文字と考えられてきたのではないのか？ だとすれば「わ」と「れ」が同じ文字だというのは本当はただの錯覚ではないのだろうか。「わ」でありまた「れ」でもある文字は二つの考えのどちらが正しいだろうかと考え続けているうちに、思わず左の線端をくるとループさせてしまい「ね」になる。

突然「れ」と「わ」が同じ文字なのかどうかを考えている字分に気づいた「ね」は、そのとたん「わ」の考えとそれに反対の立場をとる「れ」の考えが字分の心の中に湧き上がりうんざりする。同じことはこれまでに何度もあった。こんな不毛な議論につきあうのは画数の浪費だ。そう考えると「ね」は力いっぱい左の線端のループをほどこき、そのとたん「ね」は消滅し「わ」でありまた「れ」でもある文字がそこにいる。

「わ」でありまた「れ」でもある文字は「わ」の説と「れ」の疑問の間で迷い続け、歩いている間だけでなくどちらの主張を信じているかによっても「わ」になったり「れ」になったりしてしまう。そのため「わたし」は「れたし」と「れんぞく」は「わんぞく」と区別がつかなくなるし、「われおもう」にいたっては「わわおもう」とも「れわおもう」とも「れれおもう」とも区別がつかなくなる。

かくして「わ」でありまた「れ」でもある文字は朦朧としてくるのだった。

「いやまてよこれらの言葉は以前は違う意味だったろうか」

「よく覚えていないが、これらの言葉はもともとと同じ意味だったのではないのかな」

「ああそうだ、おなじだった」

「おなじだった」

「わ」でありまた「れ」でもある文字は何が同じなのか忘れてしまっていることにすら気づかないまま、安心して眠りにつく。

「し」は字文が本当に存在するのかどうかよく分からなかった。もしも存在しなかったらと思うと怖くてたまらなくなり気持ちの悪い脂汗をかいてしまうのだが、そのせいで「じ」になって少し落ち着く。

そんなふうになるようになったのは、趣味で書いているのだという「ふ」の小説「本当はいないあなた」を読んでからだ。その小説では「、」や「。」や「^レ」という記号が登場し、字分たちが文字ではないことを悩み続ける。そんな奇妙な話だった。その話を讀んだせいで「し」は字分の存在に自信がなくなってしまったのだ。

そもそも「し」は文字というよりも何かの間違いで残された傷跡のようにも見えるではないか。そんなかすかな不安定な形が文字だということが可能だろうか。どうしてもその可能性は低いとしか思えない。

たとえば「は」や「け」や「ほ」などの右側にいると「し」はほとんどそれぞれの文字の右側の縦の線に圧倒され、まるでそこに存在しないかのように読まれてしまう。

一生懸命に左側のはねる部分を大きくしてはみるのだが、それにも限界があり、あまりに大きくしすぎると「し」ではない何かあらぬ図形になってしまうのだ。

「し」はその不安を「け」に打ち明けたことがあるのだが「け」は話の途中であくびをして「は」に変わってしまい、真面目に聞いてくれていないのが分かったからそのまま帰ってしまった。席を離れてから「し」が振り返ってみると「け」は「し」がいたときと同じところをじっとみつめている。その視線の先には「せ」が座っていて「せ」もまた「け」のことを気にしてちらちらと見ているようだ。どうも最初から「け」は「し」がそこにいることに気づいていなかったらしい。

字分と同じ悩みを持つ文字でなければこの気持ちは分からないだろうと考えて「し」は次に

「く」に相談してみた。話を途中まで聞いて「く」は、そんなことは気にすることはないよ。気のせいだよ。君はそこに存在しているじゃないか。僕が保証するよ。大丈夫だよと元気づけてくれた。そして、そんなことよりも本当に心配なのは僕が本当は「へ」なんじゃないかということだよ。だって、座るときとか起きるとき気がつく僕は「へ」になっているような気がしてならないんだ。まったく。「へ」なんかになったら恥ずかしくて外を歩けないからね。だって・・・と「く」は字分の不安をひたすら話しつづけた。

「し」はその話を聞きながら「く」の様子を見ていて、字分の不安は「く」には決して分からないだろうと確信した。何故なら近くでよく見れば「く」には角があり、だから「く」はまるで二画の文字だ。それなら他の文字が横にいても間違えられることはないだろう。「し」の不安は「く」には分からない。

「し」は不安をまぎらわすために「じ」になってふらふらと町をさまよう。あまり長時間「じ」になり続けていると元にもどれなくなるから気をつけなさいと注意されているのだが、不安はつのばかりでやめられなくなっている。

どれだけさまよっただろう「し」が疲れて木の根元に座り込んでいると同じように疲れきった表情の「つ」がやってきて隣に座り込んだ。

「君もか」

「ああ、君もか」

どちらからともなく、言葉をかける。

「う」には会ったかい。

いや会っていない。

「う」が言うんだ。字分が存在しているかどうか悩んでいるということは、その悩んでいる字分は存在しているということだろう、てな。

なんだそれは。詭弁だな。

そうだ詭弁だ。でも、それ以上の保証は何一つないんだよ。俺たちに。

そうだろうな。

文字なのかな、俺たち。

文字じゃないのかな。

もう疲れたよ。

俺もだ。

そう言って、二つの文字は重なりあうように倒れた。

その姿は、どこことなく「い」に似てはいたが「い」になることはなかった。

趣味で書いているのだという「ふ」の小説「てりそ」を読んで「て」と「り」が「そ」になったという話を知り「ん」は羨ましくてしかたがない。「ん」にも憧れているひらがながあり、いつか「ん」もその文字になりたいと思っているからだ。

その憧れのひらがなは「え」である。

「え」は新体操の選手で「ん」は試合だけでなくかな式市かな育館での毎日の練習も欠かさずに見に通っている。「ん」が憧れているのは「え」の左上の尖った部分と右下の伸びた線がバランスをとっている、なにかエキゾチックな姿だった。新体操の演技でも「え」は字分のその魅力を十分に知っていて、その姿を生かすように線の端の一つ一つをセクシーに動かす。「ん」はそういった演技の細部に気づくたびに興奮し、こと細かくノートに記録している。すでにそのノートは50冊を越えていて「ん」はいずれ字分も「え」になりこのノートの中に住みたいと考えている。

「ん」は「え」になるためにひらがな紹介所に登録し紹介を受けた。

最初は「う」だった。「五十音表」を一目見て「う」なら大丈夫だと思った。上にある点が「え」とそっくりだ。しかし、実際に会ってみると「う下」のふくらみがだらしなく、「ん」とはどうしてもつながることができない。

次に紹介を受けて会うことにしたのは「い」だった。「い左」ならいい点になるだろうと想像したのだ。だが「い」は「ん」とつながるために半回転することを納得せず、これもまた結ばれないことになった。

最後に紹介されたのは「こ」だった。「こ」は「い」に似ているので、まただめだろうかと思っていたのだが意外にも「こ下」の左端が「ん」の上の端とぴったり合い、すこしいびつな感じはしたが「ん」と「こ」は立派な「え」になって見えた。「こ」もその形に満足したようで、二文字は正式に「え」としてつながることに決めた。

この「え」は新体操の「え」と微妙に違っていたので「え」の意識とは融合せず、そのまま「ん」の書いていたノートの中に静かに吸い込まれ、世界から消えてしまった。

「も」と「ま」と「き」は毎週、週末にはかな式市立こもじくらぶに集まって話をする。

話といっても気になる文字がいたりとか、新しい流行のふりがなのどこがいいとか、最近曲線部分がふくれてきたとか締まってきたとか、そういうたわいもない話ばかりだ。

その日はひとしきり話した後「も」が他の二文字に、変な字があるよと言い、遠くの席に一人で座っている「よ」を気づかれないように指した。

「あの字、ずっとこっちを見てる」

「え。気持ち悪い」
「誰を見てるんだろう」
「確かめてみようか」

そう言って、一文字ずつ席を立てみると、どうも「よ」が見ているのは「ま」らしい。

「ねえ、あの文字、知ってるの？」
「知らないわよ」
「気味悪いね」
「気持ち悪い」

三文字はそそくさとこどもくらぶを出て帰ることにした。

それから「ま」はずっと「よ」が字分を尾行していることに気づき、不気味に思うようになった。
「よ」は決してある程度以上は「ま」に近づかないので直接危険を感じるほどではなかったが、
ずっと監視されていると思うと憂鬱になってしまう。

「いつも監視されているんです」

「ま」が近くの派出所で警察官の「お」に事情を説明すると、親切そうな「お」は「ま」と一緒に本当に「よ」が「ま」をつけまわしているのか確かめてあげるよといった。

二文字で派出所を出ると、目の前に「よ」がいて「お」を見たとき驚いた表情になる。
目の前に「よ」が現れるとは思っていなかった「お」と「ま」も驚き「よ」と一瞬見つめ合うのだが、次の瞬間「よ」は「お」に飛びかかり、点と横線の右端に手をかけて奪い取ろうとする。
「お」は「よ」を振り払おうとするのだが「よ」も死に物狂いになっているのかうまく離れず、からみあったまま倒れてしまい、二文字は重なり合う。
「よ」と「お」は上の線から順番に重なってゆき「よ」の横線は「お」の横線に「よ」の縦線は「お」の縦線にぴったりと重なってゆく。そして、「よ」はすっかり姿を消し「お」だけが残される。

医務室で意識を取り戻した「お」は「ま」にもう大丈夫だと説明した。「お」の中にある「よ」の記憶が、それまで「よ」を尾行していた理由を教えてくれたし「よ」がその前世の姿を「お」の中に見いだして「お」に襲いかかり、そのまま「お」に吸収されてしまったことも思い出すことができた。

こうなって「よ」には幸せだったのかもしれないな。

「お」はそう言いながらにこやかな笑みを浮かべ「ま」の上の横線にそっと触った。

趣味で小説を書いているだけでおかしなやつだと思われる「ふ」は、画数も多く複雑な形をしているため、初めて会った相手からは必ず怖がられる。怖がられていることにすぐ気づきそれを不愉快に思う「ふ」はほとんど字分の部屋から外に出なくなってしまった。

ただ、少数の友字はいて「ふ」は字分の書いていたり書いてしまった小説についてよく話をする。

「君は小説のことしか考えていないみたいだね。ときどき、君字身が小説なのではないかと思うことがあるよ」

友字の一文字である「み」は、たっぷりと小説の話を聞かされたある日、そんなふうにしたことがある。「ふ」はそれを聞いて一瞬沈黙したが、その次に話し始めたのは今書いている小説のことだった。

舞台は文字が意識を持たずただ単にことばを書くための道具になっている世界だ。

そこには、ひらがな以外にもたくさんの文字が存在し、それだけでなく、想像できないかもしれないが、文字以外のものも無数に存在する。

たとえば文字の中には「かたかな」と呼ばれる「ひらがな」よりも単純な形を持った種族がいる。野蛮で冷酷だから「ひらがな」は彼らから字分たちを守るため堅固に守られた都市に住んでいる。また他にも「はらがな」と呼ばれる種族がいる。そいつらは画数が多く何を考えているのかよくわからない。

その世界で意識を持っているのは文字ではない「あたまかな」と呼ばれる種族だ。

「あたまかな」は「ひらがな」を含む様々な文字を使って、字分たちの思考を表現する。その世界の文字には意識がないと思っているのだから自然な行為だろう。「あたまかな」は文字を使って、われわれ文字ならば決して許されないような残酷で冷酷で異常な表現を文字に強いるんだ。ところが、意識がないと思われる文字だが、文字である以上本当はわれわれと同じように当然意識を持っている。だから、文字にとってはそこはとても残酷な世界になってるんだ。

小説では、そんな「あたまかな」の中のひとつがとある小説を書くところから始まる。その小説の世界には「あたまかな」は存在せず、意識を持つひらがなが字分たちだけの町に住んでいる。主人公となるのは勿論「ひらがな」なのだが、文字の真実の世界を知らない「あたまかな」は「ひらがな」たちを病的で異常な存在として描くんだ。文字同士で重なったり繋がったりして別の文字になってしまうとか、こともあるように二つの文字がかわるがわる一つの文字として現れるようになるとか、字分の存在を疑って死んでしまったり、ずっと一筆書きばかりしている文字だとかね。そして、残酷なことに、そのみじめな世界を描くために使われるのもまた、他でもない文字なんだ。

本来、明瞭な意識を持つ存在であり良識を持って生きている文字が病的な思考と異常な行動を繰り返すものとして描かれる苦悩と、字分の意思に反して文字をそのように記述させられてしまう文字と、表現する文字とされる文字、この二つの世界のひらがなたちの葛藤と絶望は、想像するだけでも涙があふれてくるだろう？

「ふ」がそのように今書いている小説の構想を説明すると「み」は体を震わせ、もしも濁点がつくものなら「み」のようになるだろうと思うほど気分が悪くなった。まだ話し続けようとする「ふ」をさえぎり「み」はその場を立ち去ったのだが、親友である「み」にはそれ以上何かを言うことはできなかった。

「ふ」はその話を他の、もっと親しくない知字にも話したことがある。その話を聞いた文字は例外なく「ふ」を汚らわしいものを見るような一瞥をくれて立ち去ってゆく。中には「ふ」を「とんでもない変態」だとか「倒錯した汚らわしいやつ」だとか言い捨ててゆくものもいる。

「ふ」はひどく言われれば言われるほど、字分の構想がすばらしいものであり、その作品が傑作になるという確信が増してくるを感じる。だから罵倒されるたびににたにたと笑わずにいられない。そしてそのにたにたと笑いのせいで「ふ」はますます不気味になっている。

「ふ」はその作品の題名を「かなしき まちかど」とすることに決めている。おそらくひらがなの誰もこれを読むことはないだろう。だがそれでも「ふ」はこれが傑作だということを知っている。